

はじめに

「どんなに材料が良くても腕のない料理人では美味しい料理は作れない。また、一流の料理人でも腐った材料で美味しい料理を作ることはできない。それは免疫染色も同じだ。」

つまり、多くの知識、正確な技術、正しく処理された検体、適切に管理された試薬という免疫染色に関わる全ての要素がそろわなければ、良好な染色性を得ることはできないということです。この言葉は、最初に勤めた病理専門の検査会社で免疫染色担当として配属された際、私に免疫染色の“いろは”をたたきこんでくれた上司に言われた言葉であり、いまの私の中にある知識と技術、それと免疫染色への情熱を形成しました。

免疫染色は、診断のためのツールの1つでしかありません。しかし、たった1枚の染色標本が病理診断を左右する可能性もあり、そしてそれは、患者の治療や命を左右することにもつながります。ぜひとも読者の皆さまには、1枚の染色標本の“重み”を感じながら染色していただきたいと思います。

本書は、免疫染色を行う際に「染色のコツは？」と思った“その瞬間”，染色像を観察し「なぜこんな結果に？」と思った“その瞬間”にぜひ読んで、見ていただきたいと思います。“実用的”“簡潔”“目からウロコ”の3点を重視して構成しましたので、眺め読みするだけでも面白い内容です。

1章では免疫染色で起こりやすい問題とその原因・解決策について紹介しており、日常の問題や悩みを解決します。2章では手技の違いによる染色性の比較を紹介し、良好な染色性を得るためのポイントや不良染色の原因を知ることができます。3章では一段上へのステップアップを目的に、染色のコツや知っておくためになる知識を紹介します。4章では、用手法での染色プロトコルや国内で採用されている主な自動染色装置の特徴を紹介しています。

本書を通じて、1人でも多くの方々の疑問や問題を解決し、皆さまが前回染色した標本より一歩も二歩もパワーアップしたクオリティの高い染色標本作製できるようになることを願っています。

慶應義塾大学医学部病理学教室/腫瘍センターゲノム医療ユニット 柳田 絵美衣